

2年8月25日(火)「毎日新聞」朝刊《火論》の記事が大変気に入り、借用しました。

## 「暴力という磁石」

「幼いころに暴力に接すると(それに)取り付かれる。人間は、生き残りに関わるデータにひきつけられるように生まれついているが、暴力ほど生き残りに関わるデータはないからだ」

米陸軍士官学校の教授(心理学)を務めたデーブ・グロスマン氏がその著書『戦争』の心理学人間における戦闘のメカニズム(二見書房)で書いている。

グロスマン氏と言えば、暴力の心理分析で知られる研究者だ。人間の脳は「自己プログラミング・コンピューター」であり、生き残るために重要な情報を優先的に取り込む。特に生まれてから小学校に入るぐらいまでの間に学んだことは、成人後の判断や行動に大きく影響を及ぼしやすいという。

暴力に関係する出来事は生死に関わる情報だから、磁石のように人間の意識を強く引きつける。そして幼い脳ほど暴力に関するデータを取り込みやすいのだ。

これまでの学術的研究によると、暴力を直接受けた経験がなくても紛争地などそれがまん延する



状況に育つだけで、自身も暴力的になる傾向が高まるとのデータは多数発表されている。

では、「我が家は円満だし、学校でもいじめはない」という人は心配いらぬのか？

近年、子どもが身を置く環境の一角にはインターネットという仮想空間が加わった。そこでは友達同士の言葉によるいじめや、匿名の攻撃者が特定の個人を中傷するような風潮が強まっている。

しかもいじめや中傷という暴力は直接向けられた人だけでなく傍観してただけの人でも不安を感じる事が少なくない。「明日は我が身」と委縮するからだ。

自然災害よりも人間による暴力の方が深刻な心の傷をもたらすことは、精神医学と心理学のバイブル「精神障害の診断と統計の手引き」がわざわざ特記している。「ストレスの原因が人為的なもの場合、心理的外傷はより重く、長期にわたる」

人間は自然災害には無力であり、心のどこかで「自分もいつか巻き込まれるかもしれない」と覚悟せざるをえない。ところが激しい攻撃性に遭遇する事態は通常予想していないし、なぜ自身や友人らへの攻撃を自分の力で防げなかったのかという自責の念も膨らむので心理的ショックがより大きくなりやすいという。

人は社会の暴力にさらされるほど傷つき不安になりやすいのだ。

裁判や処罰による対応だけでは限界がある。中傷という暴力に引き寄せられる心をどう引き留めるかが問われている。(専門記者)

中学校で猛烈ないじめにさらされた我が家の娘(里子)はいまだに友人も少なく、心を開かない。そんな辛い時代を思いださせられました。学校はそのいじめを見て見ぬふりでした。

(レターの記者)